

乳幼児の造形表現における保育者の関わり

Support for art expressions of infants by nursery teachers

久保田 貴美子

KUBOTA Kimiko

キーワード：幼児造形・領域表現の基礎 B・領域表現の指導法 B

1. はじめに

乳幼児期は、心身の発育・発達が著しく、人格の基礎が形成される時期である。個人差が大きいこの時期の子どもたち一人ひとりの健やかな育ちを保証するためには、心身共に安定した状態でいることのできる環境と、愛情豊かな大人の関わりが求められる。

平成 29 年（2017 年）保育所保育指針が改定され、幼稚園や幼保連携型認定こども園と共に、保育所も幼児教育の一翼を担う施設として積極的に位置づけられた。また、幼児教育において育みたい資質・能力と、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿も具体的に提示された。

保育所においては乳幼児期の子どもが長期にわたって在籍することを踏まえ、今回の改定では特に乳児及び 1 歳以上 3 歳未満児の保育に関する記載の充実が図られた。乳児保育については、「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちを通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」という三つの視点から、保育の内容が記載された。また 1 歳以上 3 歳未満児の保育の内容に関しては、乳児保育の内容の三つの視点及び 3 歳以上児の保育の内容における五つの領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）と連続するものであることを意識しながら明示された。

保育とは、子どもの現在と未来をつなげる営みであり、子どもの現在のありのままを受けとめ、その心の安定を図りながらきめ細かく対応していくことである。子どもは安心感や信頼感のある生活の中で、身近な環境への興味や関心を深め、その活動を広げていく。保育所における保育は、環境を通して行うことを基本としており、その環境は、設備や遊具などの物的環境、自然や社会の事象だけでなく、保育士や子どもなどの人的環境も含んでおり、こうした人、物、場が相互に関連しあって作り出されていくものである。造形表現とは、こういった身の回りのものに深く関わる表現であるため、人間の生活と切り離すことができないものと言えよう。本稿では、乳児及び 1 歳以上 3 歳未満児の、造形表現に関する保育者の関わりについて、考察していきたいと思う。

2. 乳児における造形表現援助のポイント

豊かな材料、自然、生活などの環境と出会うことを繰り返して、子どもたちの能力や感性は豊かになり、表現は深まっていく。そのためには愛されている、満たされているという実感、すなわち親や保育者との絶対的な信頼関係、また心穏やかにいられる空間、雰囲気作りなど人的・物的な環境の整備が必要である。特に乳児の場合は、「ふれあい」を第一の基本において子どもと日々関わっていくことが重要である。人に触れられて心地良いと感じる関わりを持ったり、自然のものに触れることで五感を磨いていったりしながら、興味や好奇心を広げていくことは、子どもに様々な心情

をもたらし、自ら関わろうとする意欲を引き出していく。

乳児は、特定の保育者が愛情豊かに優しく語りかけながら世話をすることにより、顔を見たり、表情を変えたり、声に反応したり、手足を動かしたり、子どもなりに自分の気持ちを表現するようになる。自分に向けられる優しいまなざしや、態度、やり取り、スキンシップ等が、心の安定となり、身体感覚を育てることにつながるのである。子どもは気持ちが安定すると、好奇心が広がり、新たに気づいたことや、自分で成し遂げたことを伝えようとする。乳児は本来、物事に挑もうとするエネルギーを持っているので、それを発揮させるためには、ゆったりと落ち着いた雰囲気の中で、生理的・心理的欲求などの基本的な欲求を満たし、情緒の安定した生活を送ることが何よりも大切である。

その中で乳児は、自分の成長発達に合わせて遊びを見つけていく。周りにあるすべてのものが遊びの素材・刺激になるが、自分の興味・好奇心に導かれて触れていく世界は、新たな出会いや発見に満ちている。じっとものを見つめたり、触ったり、口に入れたりなどと、五感すべてを使って探索することで、ものとの新しい関わりを発見し、感覚の働きも豊かになる。例えば、散歩に出かけた時に保育者が、「水がつめたいね」「葉っぱの色がきれいだね」「風の音がするね」「なんだろう、不思議だね」などと声をかけることによって、子どもはその美しさや不思議さ、魅力に気づいていく。こうした経験を積み重ねることで、子どもの豊かな情感が育ち、感性や表現しようとする意欲が培われていくのである。

遊具や玩具などは、その時々の子どものふさわしいものを適切に選ぶことが求められるが、玩具を与えたとしても、しばらくは「どんな遊びを始めるかな」とその始まりを待つ姿勢が大切である。なめたり、繰り返し触ったり、投げたり、様々なことを試しながら繰り返して遊ぶ中で、子どもはできなかったことができるようになったり、ものの特性に気づいていったりする。「させる」「やらせる」保育ではなく、その時々の子どもの状況に応じて、応答的な環境の構成や援助をすることが大切である。また、遊びの中で発見したことや嬉しかったことなどを、保育者と共有することによって、子どもは安心して自己主張（表出・表現）ができ、自我の形成へとつながっていく。したがって乳児期においては、無理に何かを作らせようとするのではなく、身近な環境に興味や好奇心を持って関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培うことがねらいとなるのである。

3. 1歳以上3歳未満児における造形表現援助のポイント

この時期は、歩行が始まることにより生活空間が広がっていく。乳児期よりもさらに多様なものに出会い、全身を使って触れ合うことで、そのものの性質や特徴を自らの感覚によって捉えるようになる。こうした自らの身体感覚を通じた経験の積み重ねが、子どもの世界を広げ、イメージの蓄積となり、やがて表現する力や、創造力の発達につながっていく。

子どもは豊かな環境に触れ、心が動く経験をする、それを表現せずにはいられなくなる。例えば冬に雪がたくさん降った場合、子どもたちはどういった行動をするだろうか。手で雪を触って冷たさを確かめたり、誰も踏んでいない雪の上にそっと足跡をつけたり、雪の球を作って並べたり、大きな雪だるまを友達と一緒に作ったり、あるいは雪を食べたりするかもしれない。雪というものに出会い、五感で雪を感じ、心が動かされ、子どもたちは一人ひとり、自分の感じた心を行為として表すのである。つまり「表現する」ということは「感じる」と同じく、人間の本能的な営みであって、生きる喜びとなるはずである。保育者は子ども一人ひとりの表現（あらわし）を、その子のかけがえのない生の営みの痕跡として受け止めていくことが大切である。そのためには保育者

自身も感性を豊かに持ち、共感を持って子どもの感動や発見に寄り添う必要がある。

ところで1歳前後になると、紙やクレヨンなどの描画材を与えて、初めてのお絵かき（線あそび）が行われることが多い。しかしこの時期の子どもは、紙を与えると、破いたり、くしゃくしゃにしたり、振り回したり、またクレヨンを持たせると、折ったり、投げたり、口に入れたり、巻いてある紙をはいだりして、大人にとっては困った行動のように映ることもある。線あそびを楽しんでほしいという思いが子どもになかなか伝わらず、もどかしい気持ちになる保育者も多い。大人は、クレヨンは描く道具ということを手で知っているのだから、このクレヨンで何が出来るか、何が描けるかということを考えるが、この時期の子どもは「それで何が出来るか」ということは考えない。まずは「これなんだ？」とそのものの自体に全身で挑み、五感を使って探索する。そうすることによって心が動いて、面白いな、不思議だな、楽しいなといった感情や、こわいな、つらいなといったマイナスの感情も生まれてくるのである。保育所等での生活においては、快ばかりでなく不快なことを経験することも大切である。プラスばかりでなくマイナスの感情も含めて、いろいろなことをたくさん感じることで、その感じたことが子どもの中に感性的記憶として蓄積される。そしてそれが子どもの行動すなわち「あらわれ」として外に出てくるのであり、これこそがまさに「表現する」ということである。

この時期の子どもは、運動能力や認知能力、興味・関心などの個人差が大きいので、一人ひとりの子どものことについて十分に理解を深めて、環境を構成することが重要である。また、子どもが感じ取ったことを、保育者が共感を持って受け止め、その感覚とイメージを結ぶ言葉をかけることによって、子どものイメージはさらに広がり、感性も豊かになっていく。

また、子どもは人への基本的信頼感があると、周囲の子ども等にも興味を示し、関わりを持つようとする。イメージを共有した遊びはまだ難しいが、ただ一緒にいるだけで心地よさや楽しさを感じ、それが社会性の芽生えへとつながっていく。とはいえ、相手の意志が十分わかっていない子どもどうしの関わりなので、トラブルも起こりやすい。トラブルの発生については、子どもたちの様子や遊びをよく見守って対処することが求められる。

子どもたちは、この時期、水、砂、土、紙などさまざまな素材と出会い、繰り返し遊び込んでいく。その一つひとつの体験の中で、子どもたちは多くのことを学んでいる。例えば、砂や土では、触覚を通しての感性が豊かになり、指先の動きが発達する。自由に形を変えられる面白さを体験し、立体的な形に対する感性、見立てる力なども養われる。こういった自発的な遊びを通して、子どもたちは成長発達していくが、その行動が活発になり、創造的で主体的な取り組みの芽が育つように、保育者は適切な援助をする必要がある。

2歳児にもなると、ある程度イメージしたことが色や形で表現できるため、保育者の提案で造形表現活動を行うことが可能となる。しかし本来は自由に遊んでいる子どもたちなので、保育者が活動を用意する場合には、自由に遊んでいる時と同じように楽しい活動となるような配慮が必要である。活動内容や方法が子どもの興味にあっていない、用具や材料の扱いが難しいなど、活動のねらいが極端に保育者中心であると、子どもにとって楽しい遊びにならないため、活動への意欲は高まらない。主導は保育者であるが、活動の主体は子どもであるので、保育者はテーマやヒントを確実に子どもに伝え、子どもに面白そう、やってみたいなという思いをまず持たせることが重要なのである。

4. 具体例

乳児・1歳以上3歳未満児でよく行われる造形遊びとして、新聞紙遊びやボディペインティングがある。ここでは、それらの遊びを例に、子どもの姿や保育者の関わりについて考察していく。

(1) 新聞紙遊び

〈ねらい〉

- ・身近な素材を使って開放的に活動する。
- ・手や指先を使い、破ったり丸めたりすることで、感触や感覚、音の違いなどに気付き、五感に刺激を与える。
- ・体全体を使ってダイナミックに遊ぶことで、喜びや驚きを表現できるようになる。
- ・面白さの発見からイメージを膨らませることで、見立て遊びを楽しむ。
- ・家ではなかなかできない活動が思いきりできるように、一人ひとりの感覚でそのままを楽しむ。

〈子どもの姿〉

- ・新聞紙をそのまま、布団にして隠れて遊ぶ。
- ・丸めたり、ちぎったりして遊ぶ。音に合わせてちぎり、音の違いに気がついて楽しむ。
- ・紙ふぶきで、それぞれが思い思いに遊ぶ。
- ・丸めた新聞紙をボールにして、友だちや保育者と一緒に投げて遊ぶ。
- ・保育者にいろいろなものを作ってほしいと要求する。
- ・友だちがしていることが気になり、同じものを作ろうとしたり、同じ遊びをしたりしようとする。

〈事例〉

新聞紙遊びをしたあと、楽しかったことや発見したことなどを家族に伝えたくて、小さくちぎって遊んだ新聞紙を、カバンの中に入れて持ち帰った。

Aちゃん(2歳児)の場合…母親に「ゴミだから捨てて帰りなさい」と言われ、楽しく遊んだ宝物の新聞紙を受け入れてもらえなかった。その後、新聞紙遊びをしても、新聞紙を「ゴミ」と言い、カバンに入れて持ち帰ることはなかった。見立て遊びもできなくなり、遊びの世界が狭まった。家庭では、母親がとても几帳面で、きれい好きである。また保護者中心の生活で、起床や就寝が遅く、朝食はとっていない。保育所では、給食やおやつはよく食べるが、偏食が激しい。遊び始めるのに時間がかかり、あくびがよく出る。

Bくん(2歳児)の場合…楽しく遊んだ宝物の新聞紙で、父親の誕生日を紙ふぶきでお祝いしようと母親に提案された。自分が楽しい経験をしたもので、大好きな家族のお祝いができることの喜びを心と体で感じた。家庭では、保護者が子どもとしっかり向き合う時間が作られており、家族からの愛情をたっぷりと受けている。子どもに振り回されているところもあるが、本人の思いをきちんと受けとめた関わりをしている。

〈保育者の関わり〉

Aちゃんの場合は、母親に新聞紙を「ゴミ」と言われたことで、楽しかった経験そのものを否定され、自分自身が認められないような寂しさを味わった。それに対してBくんは、新聞紙をさらに活用してもらえることで、自分の思いを受けとめられた安心感と信頼感を得ることができ、自己肯定感へとつながっていった。Aちゃんの場合は、家庭での生活リズムや、母親の心情などが影響を及ぼしていると考えられるが、保育所での楽しかった活動の様子を写真に撮ったり、新聞紙に込められた子どもの思いを具体的に言葉にして伝えたりするなど、少しずつでも保護者の子ども理解が

深まるようにすることが大切である。大人にとっては、ただの「ゴミ」に見えるかもしれないが、子どもにとっては、夢中になって遊び込める素材であり、この遊びを通して子どもは成長していくのである。

新聞紙遊びでは、それぞれの子どもが新聞紙という素材に出会い、何を感じ、どのような遊びに展開させるかが、重要なポイントとなる。保育者が遊びの展開を決めて誘導するのではなく、子ども一人ひとりの思いやイメージしたこと、感じたことなどをしっかりと受け止め認めることで、子どもは安心できる環境のもと、自発的、意欲的に活動に取り組む。まずは子ども自身が愛されていると感じることが大切である。そうしたうえで、その時その時の体験をよいイメージとして心の中にインプットし、蓄積されていくことが、子どもの感性、表現力、想像力を育てることになる。新聞紙遊びのように、時を変えて何度も遊ぶ活動は、その度に同じような場面で刺激を受けて、これまでにインプットされたものが心の中によみがえってくる。経験した出来事を記憶する力や、イメージする力の育ちは、この時期の子どもの生活や遊びを豊かなものにするのである。Aちゃんの場合は、Bくん比べて少し時間はかかるかもしれないが、Aちゃんが味わった寂しいという思いも丁寧を受け止め、思いに沿った言葉をかけながら、意欲を支えていくことが求められる。

(2) ボディペインティング

〈ねらい〉

- ・全身を使って素材に触れる遊びを楽しむことで、心と体の開放感を味わう。
- ・絵の具の感触や匂い、色の変化などを味わうことで、五感を磨き、感性を育てていく。
- ・保育者や友だちと一緒に楽しさを共有する。
- ・喜びや驚き、発見などを全身で表せるようになる。

〈子どもの姿〉

- ・体全体でダイナミックに遊びを楽しむ。
- ・筆を使った絵の具あそびは抵抗なく行えるが、直接触るボディペインティングでは、肌に絵の具がつくことを嫌がり、涙が出たり、汚れてしまったという思いを強く持ったりする子がいる。
- ・初めは興味と不安でじっとしているが、周りの友だちや保育者が触っているのを見て、少しずつテーブルの上の絵の具に触ったり、自分の体に絵の具をつけたりし始める。
- ・絵の具が手につくのを嫌がり、すぐに手を洗おうとする。

〈事例〉

Cくん(2歳児)の場合…ボディペインティングや制作活動などは、嫌がらずに行うが、絵の具が手につくとすぐに洗い流し、のりもぬれタオルで拭いている。自分の手や指が汚れてしまったという嫌な気持ちになり、活動を思いきり楽しめていない。家庭では、母親がきれい好きで、食事中に汚すと厳しく叱り、すぐに清潔にする。また母親が食べさせていたことで、手づかみでものを食べる体験をしていない。したがって保育所では、食べ物で手が汚れることを嫌がり、直接食材に触れて、自分から食べようとはしない。机が汚れると、すぐにおしぼりで拭いている。食材に触れる度、保育者の顔を伺う様子が見られ、スプーン・フォークに興味を持ち始めて自分で食べようとした時も、保育者に援助を求めることが多い。

Dちゃん(1歳児)の場合…週3日程度の登所だが、喜怒哀楽をしっかり表し、活動にも意欲的に取り組んでいる。人見知りがあり、クラスの数が増えると少し戸惑った様子も見られるが、自分のペースで過ごし、思いもきちんと表出できている。家庭では、親子一緒の時間を大切に考えており、仕事が休みの時はなるべく家で一緒に過ごしたいとのこと。

〈保育者の関わり〉

Cくんの場合は、手づかみでものを食べる経験がなく、汚したら叱られるという不安があって、ボディペインティングという、いわば汚す（汚れる）活動に積極的に取り組むことができなかった。汚れても大丈夫という安心感を持つことで、思い切り表現して遊べるようになるので、保育者は汚れることを気にするよりも、自らも楽しんで遊ぶなど、子どもが安心して遊び込めるような環境を整えることが大切である。また食事の際には、友だちの姿を見たり、手づかみで食べることを知らせたりして援助し、その姿を認めていくことで、少しずつ食材を手でつかむことができるようになり、自信へとつながっていく。汚れること以上に、楽しいと感じることや、できたという達成感を味わうことが、不安を取り除くことにつながるのである。

Dちゃんの場合は、保護者からの十分な愛情が土台となり、自分の居場所がはっきりしているので、保育所という社会にも落ち着いて順応している。愛されているという実感、自己肯定感があるため、未知の世界にも好奇心を持って挑み、多くの発見や心が動く経験を得ることができるのである。

ボディペインティングの終わりには、汚れた体をシャワーできれいに洗い、水の冷たさを全身で感じながら、絵の具まみれの体がもとどおりになっていく。この爽快感は一種のカタルシスであり、これを繰り返すことで、汚れることに対する不安は少なくなっていく。保護者へは、汚れたことよりも、楽しく遊んでいる子どもの様子を知らせたり、家ではできないダイナミックな活動の良さを伝えたりして、理解を求めることが大切である。

5. おわりに

以上のように、この時期の子どもの造形表現は、絵や工作といった具体的な成果物ではなく、遊びや生活の様々な場面で表出されているものと捉えることができる。保育者は、それらを積極的に受け止め、様々な表現の仕方や感性を豊かにする土台となるようにしなくてはならない。

子ども一人ひとりが、自分の興味・関心のあるものと出会い、心を動かされ、それを何らかの形あるいは行為として表すときの生き生きとした表情、それは落ち着いた環境のもとで、信頼している大人たちに見守られながら、今を充実して生き、未来へとつながっていく、まさにその一瞬の表情である。日々の生活の中で生まれる喜びや発見や感動を、表現へとつなげることによって、自己肯定感を感じ、心の豊かさを育むことができるのである。

〈参考文献等〉

厚生労働省編 保育所保育指針解説 フレーベル館

岡田愨吾著 3歳未満児の環境と造形 サクラクレパス出版部

なお、本稿の事例は社会福祉法人報正会みつや保育所（安芸高田市）の2014年度のものである。